書評

狩俣恵一著

『南島歌謡の研究』を読む

田畑千秋

待望されていた、國學院短期大学狩俣恵一教授（以下著者）の高著、『南島歌謡の研究』が出版になった。本書は日本の南に連なる奄美、沖縄、宮古、八重山の島々の、さまざまな歌謡を、伝承の場に密着しながら、解き明かそうと試みたすぐれた論文集である。本書は、その研究対象とする地域が、言語学でいういわゆる琉球方言圏であり、著者が沖縄県八重山群島の竹富島出身の研究者であることを思うとき、まさに、著者として最適な人物を得たと思われる。というのは琉球方言圏の文芸、特に口承文芸の調査、研究には、その方言の理解において、本土方言圏の人には大きなハンディをともなうと思うからである。それは言葉の表面的理解にとどまらず、言葉の内部にこもる人々の歴史を通して、また生活を通して、心のひだの奥底にまで至らなくてはならないとき、なおさらである。そしてそれに加えて、著者は、単に南島に生まれ育ったというだけでなく、「私は、仲筋集落の狂言の子役として種子取祭に参加した」とあるように、本書の研究の必然性は、著者の生活の中にもあったのである。巻頭の國學院大學名誉教授臼田甚五郎先生の御序文の一節に、「狩俣君の南島歌謡の研究には、彼が種子取祭の伝承者として五体に滲み込んでゐるユークイの想ひ、生活感情に根差したユークイの意気溢れたものが、論文の間にもひたひたと溢れんばかりに満ちてゐるやうに思はれる」とあるが、まさに著者の生活に根ざした感性が、本書の随所にほとばしりでているようにも思える。特に竹富島に関する調査・研究は、余人の追随を許さない精緻なものであり、おそらくこれが本当の郷土研究の極みというものであろう。ちなみに本書は、著者が高等学校を卒業後、國學院大學の臼田甚五郎先生に師事して、一貫して南島歌謡の研究に邁進した、その成果の集大成でもある。

本書は、さまざまな場で、さまざまな内容を、さまざまな形態で、ヨミ、ウタイ、トナエル南島歌謡の全体像をとらえようとした大著であり、誌面で、そのすべてを紹介することはとうていできない。そこで、本書がもっとも力点を置いていると思われる、著者の南島歌謡発生論を簡単にみてみたい。

著者は序章において、南島歌謡の研究史を述べた後、南島歌謡の発生論を、

(1)南島歌謡の発生論には、呪詞や叙事歌謡の長詞形の発生を中心に考える説と、長詞形と短詞形が始源から並存していたと考える説がある。

(2)長詞形を中心とする発生説には二つの考え方がある。一つは、ノロなどが共同体の祭りで唱える呪詞に南島歌謡の発生を求めるもので、その呪詞の母胎はマレビトの発する神口であるとする説である。二つには、ユタなどの巫者が唱える呪詞に南島歌謡の発生を求めるもので、その呪詞の母胎は神がかりによって発する詞章にあるとする説である。

(3)谷川健一は、(2)の後者、すなわち神がかり発生論を支持しつつも、その前段階としてクチ（呪言）の時代を想

定して南島歌謡の発生を考えている。

と、三項に整理して述べた後、本書のとる立場として、

本書はクチ（呪言）の時代を想定する立場であり、短詞形のクチ（呪言）から長詞形の叙事と短詞形の抒情が発生したと考えている。したがって、筆者は（3）の谷川の見解と同じくするが、谷川の呪言発生説をそのまま首肯するものではない。また、筆者は短詞形の呪言が神がかりをとおして長詞形の呪詞が生まれると考えているが、従来の神がかり発生論をそのまま首肯するものではない。

と言う。そして、その理由として、

筆者は二種類の神がかりがあると考えているからである。一つは、精霊との〈言問い〉をとおしての神がかりであり、二つには、突発的な神がかりである。そして、それらの神がかりのなかで、ある程度のまとまった内容の詞章を発することができるのは前者の神がかりであり、その神がかりを媒介として短詞形から長詞形の呪詞が成立したと考えている。

と述べている。これは、本書全体をとおしてわかることだが、著者が絶えず伝承の場に身をおいて、実証的に読み解こうとしている視座からの重要な発言である。そして、その結果を終章「南島歌謡の発生」において、「祭祀歌謡の発生」、「短詞形歌謡の発生」、「誦詠文芸の発生」としてまとめている。そして著者はそれをさらに序章の「本書の立場と構成」の中で整理しているので、それをみてみよう。著者は「祭祀歌謡の発生」を、

ユタやカンカカリャーなどは、成巫過程において憑りついた精霊との〈言問い〉を行うが、その〈言問い〉をとおして〈短詞形の呪言〉は〈長詞形の呪詞〉へと成長する。そして、その呪詞が神がかり状態で発せられ、それがいつしか共同体の祭りで唱える呪詞や神謡（神名列挙叙事・巡行叙事・生産叙事など）となった。要するに、短詞形の呪言が長詞形の呪詞へと成長したのは、成巫過程における〈言問い〉にあったということである。

と述べ、また、「短詞形歌謡の発生」を、

短詞形歌謡の母胎は呪言であると述べ、八重山のトゥバラーマや宮古のトーガニアーグや奄美のユングトゥなどを事例として考察した。その結論は、〈言問いの呪言〉を母胎にして不定形の短詞形歌謡が発生し、さらには八八八六音の琉歌形式へと成長したということである。

として、さらに、「誦詠文芸の発生」を、

南島には〈歌う〉という動詞が存在せず、〈誦む〉が一般的であったことを述べた。そして、そのような〈誦む〉に覆われた南島において、奄美のユングトゥ（誦み言）を母胎とする八重山のユングトゥが一ジャンルとして発達したのは、ユングトゥが祭りの神名列挙叙事・巡行叙事・生産叙事とは異なった役割を担っていたからである。その役割とは、「笑い」を主眼にして演じ手と動植物が一体化することであり、一人で誦詠することであった。しかも、呪言も呪詞や音律的には誦詠とみなされるものである。そのことを勘案するならば、誦詠を元として高旋律化したものが歌謡となり、低旋律化で語られたものが説話になったと考えられる。要するに、南島歌謡は、長詞形

・短詞形にかぎらず、誦詠文芸においても〈呪言〉を核にして成長したのであり、呪言の発生こそ南島歌謡の発生であった。そしてその呪言は、祭り以前のアニミズムの時代から伝承されていたのであった。

と結論づけている。これは著者が、南島歌謡の発生の最初に呪言（精霊との言問い）を位置づけ、それを誦むということの重要性を説きながら述べているのである。そして、呪言を友好的呪言、敵対的呪言という言葉を使って分け、「八重山のユングトゥは精霊との友好的遊戯的な雰囲気のなかで生成されたが、それとは逆に、奄美のサカ歌は敵対的呪言から生成されたものである」としたのは、その背景にアニミズムの社会を考えているからであり、著者の南島歌謡発生論の大きな特徴になっている。また、著者は巻末に、「南島口承文芸の発生」という図表を提示して、読者の理解の一助としている。その中において、南島の口承文芸を、短詞形歌謡、呪詞、長詞形歌謡、誦詠、童言葉、芸能、説話に分類し、短詞形歌謡の中に琉歌・トゥバラーマ・トーガニアーグ等を位置づけ、その元には人間同士の言問いがあるとしている。呪詞としては神口・願い口・オタカベ・ミセセル等を、長詞形歌謡としては神名列挙叙事・物尽くし・生産叙事・巡行叙事・物語歌謡を、誦詠としては八重山のユングトゥを、童言葉としてはわらべ歌・奄美の童ユングトゥを、芸能としては狂言・組踊りを、説話としては神話・伝説・昔話・世間話を、それぞれに位置づけている。この分類法もこれまでの分類と大きく異なった著者独自のものであり、本書の大きな成果のひとつである。

前述したように、本書は五百頁におよぶ大著であり、その全容を限られた紙数で紹介することはとうていできないが、本書の構成と内容をかいま見てもらうために、目次の章立て、節立てをあげると、

序章　研究史と本書の立場、第一章　ニライカナイの伝承、第一節　死霊とニライカナイ、第二節　来訪する祖霊、第三節　来訪神と神酒の歌、第四節　ニライカナイとこの世の往来、第二章　御嶽と祭祀伝承、第一節　御嶽の神と農耕祭祀、第二節　竹富島の種子取祭、第三節　由来伝承と呪詞と歌謡、第四節　種子取祭の神事芸能、第三章　南島の呪言と呪詞、第一節　南島の呪言、第二節　呪言と呪詞の様式、第三節　南島の呪詞、第四章　南島の物語歌謡、第一節　叙事歌謡の諸相、第二節　物語歌謡の諸相、第三節　物語歌謡の様式、終章　南島歌謡の発生

となっている。そして、大変ありがたいことに、ジンムヌ、深山蜘蛛ユングトゥ、星のユングトゥ、ザンのユングトゥ、世果報口説、祓い声、イソ殿のフサ、ミャームギのフサ、仲筋ホンジャーの口上、お神酒の飾り口、巻き歌、稲が種子アヨーと根下りユンタ、シキタ盆節を録音したMDが付録として添付されていて、現地での音声をいながらにして再生し、味わうことができる。

本書は、詳細な調査と鋭い分析で、南島歌謡のさまざまな部分に切り込み、新しい見解を随所で述べている。それだけに南島歌謡研究だけでなく、折口信夫以来多くの研究者によって検討された、日本文学発生論に新たな一ページを加えるものである。

今後、南島歌謡研究の大いなる進展のために、ぜひ多くの人々によって、本書が評価されると同時に、著者の研究がますます深まり、その成果が続々と発表されることを願っている。

（たばた・ちあき／大分大学）